

9 国宝修繕

前年（明治三十一年）に引き続き、本年の年報にも依頼製作の記載がない。これは美術学校騒動のさなかで該事業が批判されたことにより、学校当局が自粛して受託を差し控えたためと考えられる。しかし、翌三十三年以降は再び旧来どおりに事業が再開される。この国宝修繕も三十三年から三十四年にかけて同事業の一つとして行われたもので、三十二年においてはその準備のみが行われたのである。

関連事項

① 職員任免その他

明治三十三年
一月二十三日 文庫掛橋爪正芳は教務掛を、会計掛高田松男、齋藤

一男、大島盛造は教務掛兼務を命ぜられる。

二月十三日 教授尺秀三郎は文部省視学官兼任を命ぜられる（同

月十七日普通学務局勤務）。

十八日 天草神来助教となる。

三月六日 伊藤雄次郎雇を命ぜられる（日給九十銭）。

九日 長原孝太郎本官（理科大学助手）を免ぜられ本校助教

授専任となる。

十五日 大沼親光雇を命ぜられる（文庫掛）。雇文庫掛主務森

川清依願解雇。

二十七日 会計掛書記高田松男文庫掛主務兼会計掛を命ぜられ

る。

四月八日 教授尺秀三郎非職を命ぜられる（六月二十八日奈良県

視学官となる）。

十日 嘱託羽田禎之進助教となる。

十四日 書記野田義守歳入歳出外現金出納官吏を命ぜられる。

五月 和田英作（無給教場助手）渡仏のため辞職。

二十六日 高橋昌長雇を命ぜられる（会計掛）。

三十一日 嘱託黒川真頼病氣（中風）につき依願解嘱。

六月二日 助教小坂力松（象堂）病死。

三日 教授香川勝広文官分限令により休職。

十四日 嘱託森林太郎（鷗外）十二師団へ転任につき解嘱。

慰勞金百円贈付。

二十三日 帝国博物館技手小杉楹榎本校教授兼任を命ぜられる。

三十日 大沢三之助依願解嘱（同年中入隊）。

七月七日 岩村透は西洋美術史授業を、瀧精一は美学授業を（各報酬一ヶ年三百円）、武田五一は図案科建築裝飾史及び用器画法授業を（一ヶ年四百八十円）嘱託される。

歴書では七月四日）
十七日 塚本靖渡欧のため解嘱される。

八月三日 橋爪正芳依願解雇。

四日 増井兼吉雇を命ぜられる（月俸十円。教務掛兼庶務掛）。

二十一日 川端玉章、高村光雲、黒田清輝、長沼守敬、浅井忠、石川光明、久米桂一郎、合田清、大村西崖ら教員はパリ万国博覧会出品物美術製作品鑑査官を命ぜられる。

九月十五日 嘱託本田幸之助(種竹)支那歴代美術、文学調査のため出発(自費)。

十月十三日 浅井忠、和田英作フランス留学を命ぜられる。

十八日 嘱託大村西崖(彫刻担任及び庶務、教務掛主務)西洋考古学授業兼務を命ぜられる。

二十六日 会計掛高橋昌長文庫掛を命ぜられる。

二十八日 田中重次郎雇を命ぜられる(月俸十五円。会計掛)。

十一月五日 教授久米桂一郎休職を命ぜられる(同月二十四日、向一ヶ年間仏国へ私費渡航の件許可され、二月二日出発)。

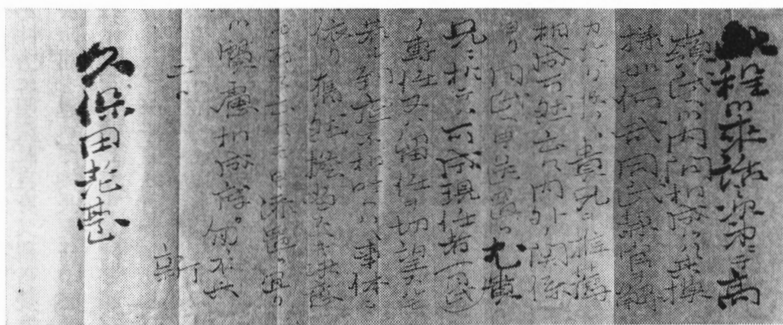
二十五日 小林万吾雇を命ぜられる。

十二月二十一日 田島応親へ仏語授業嘱託(一ヶ年二百四十円)。嘱託合田清渡仏のため解嘱。雇川上弘次郎病死。

二十三日 嘱託塩田真解嘱。

② 後任校長問題

明治三十一年十二月二十二日、女子高等師範学校校長兼本校校長の高嶺秀夫は兼官を解かれ、帝国博物館の主事兼本校幹事であった久保田鼎が本校教授兼任を命ぜられ、同時に本校校長心得を命ぜられた。この人選の背後に本校初代校長をつとめた浜尾新(明治二十三年貴族院議員、同二十六年帝国大学総長、同三十年文部大臣)の力が働いていたことは、左記の浜尾の久保田鼎宛書簡に徴して明らかである。



久保田鼎宛浜尾新書簡(久保田家蔵)

此程御來話之次第ニテ高嶺氏へ御内問相成候ハ、其模様如何哉 同氏兼官ヲ解カルヘク候ハ、貴兄ヲ推薦相成可然云々内外ノ關係ヨリ同氏へ申送置候 尤貴兄ニ於テハ可成現任者(同氏)ノ專任又ハ留任ヲ切望スルモ若シ到底不相叶候ハ、事体ニ依リ舊然擔当スヘキ決意モ有之云々モ申添置候 宜ク御賢慮相成度候 勿々不具

二日 新

久保田老臺

〔消印〕武藏 東京小石川
〔二字不明〕

□一年十月二日イ便〕封表

〔下谷区上野公園帝國博物館官舎 久保田鼎殿 親展〕封裏「緘 東京小石川

金富町卅三番地 濱尾新」

なお、不明字は文面から推して「卅」であったと考えられる。久保田家蔵)